

paṭimuñcati と *paṭimuccati* ——パーリ語における受動語幹が表す中動態——

坂 英 世

パーリ語を含む中期インド・アーリヤ語の動詞では、遺存形を除き中動態 (mid.) の語尾が消失していく一方、特定の語幹を用いた語形が意味上 mid. の機能を担うことが知られる。その一つが受動 (-ya-/ñya-) 語幹であり、もう一つが使役 (-e-/pe- etc.) 語幹である。前者については Geiger 以来指摘されてきた¹⁾。後者についても Sakamoto-Goto 1993²⁾ により整理され、該当する動詞を参照できる。

本稿では受動語幹が表す mid. を扱う。動詞 *prati-muc* はパーリ語で現在形 *paṭimuñca*^{-ti} をもち、これに対し受動語幹を用いた *paṭimucca*^{-ti} が現れた場合、一見して <act.:pass.> の対立関係と看做し得る。しかしこの対立が意味上 <act.:mid.> として機能する場合があるというのが本稿の主張である。これまで指摘されておらず、且つテキスト批判に関わるため、報告に値すると判断した。

1. 古インド・アーリヤ語における *prati-muc* は RV 以来確認される。*muc* 「解き放す」に前綴り *prati* が付くことで「～に向かって放ちつける、放りかける」を意味し、PW 及び pw により確認すると、一般には次のような用法をもつ他動詞である。act. 「何かに (dat., loc., gen.) 何かを (acc.) 着せる、結びつける」 e.g. ŚB (Ed. Weber) I 8, 1, 5 *tāsya śṛṅge nāvāḥ pāsāṃ prātimumoca*. 《[マヌは] そいつ (魚) の角に舟のロープを結びつけた》。mid. 「何かを (acc.) まとう、着る」 e.g. RV (Ed. Aufrecht) IV 53 (349), 2b *piśāṅgaṃ drāpīm prāti muñcate kavīḥ* / 《赤茶色の衣をまとう、見者は》。この場合の mid. の機能は indirect-reflexive (間接再帰的) として説明できるだろう³⁾。つまり、act. の際に dat. などで表される補語の部分が mid. では動作主自身になり、「自らにつける (i.e. まとう、着る)」を意味することとなる。

パーリ語でも同様の意味で用いられ、act. の構文では補語は loc. として現れる。e.g. Vin I 208, 17- "*haṇḍaṃ imaṃ tiṇaṇḍupakaṃ tassā dārikāya sīse paṭimuñcā*" ti. 《「さあ、この草の輪っかをその少女の頭に被せよ」と》。また pass. を自動詞として用いる例が見られる。e.g. Ja III 239, 25*- *iddhimayapattacīvaraṃ ākāśato otaritvā sarīre paṭimucci* [Be, Se -muñci].

《神通力から成る鉢と衣が虚空から降りてきて、体に備わった》。

2.

2.1. 以下に問題となる SN I 4, 5 (Ujñhāsaññi-sutta) の一節を挙げる。

SN I 24, 22-#25, 4- *accayaṃ desayantīnaṃ yo ce* [Ee *ve*] *na paṭigaṇḥati / kopantaro dosagaru sa veraṃ paṭimuccatī* [Be -*muñcatī*] // *ti*.

「過ちを認めている者たちの〔過ち〕を受け容れないならば、内に怒りをもち、憎しみが多くを占め、そういう者は敵意をまとう」と。

まず Be を除き、読みは -*muccati* を支持する。これに対し PED s.v. *paṭimuñcati* に “*veraṃ °muñcati* for *°muccati*!” とあり、Geiger 1990, 38, 4) においても “Es ist doch wohl *paṭimuñcati* (nicht -*muccati*) zu lezen” とし⁴⁾、いずれも -*muccati* を受身の意味と見てか -*muñcati* の読みを提案する。しかし意味の点からは、*vera-* (敵意) を動作主が「自らに留める (i.e. まとう)」のであるから、indirect-reflexive mid. として理解できる。この点は次の註釈の記述も参考となる。

Spk I 66, 10- <*sa veraṃ paṭimuccatī* [Be -*muñcatī*]> *ti so evarūpo gaṇḍhikaṃ paṭimuñcanto* [Se -*muccanto*]⁵⁾ *viya taṃ veraṃ attani paṭimuccati* [Be -*muñcatī*], *ṭhabeti, na paṇissajjati ti attho*. 「そういう者は敵意をまとう」とは、彼は留め具を留めているかのように、そのような形でその敵意を自らに留める、〔つまり〕留め置く、手放さないという意味である。

ここに *attani* の語が確認できるが、direct-reflexive (直接再帰的)、indirect-reflexive であれば再帰代名詞、reciprocal (相互的) であれば *anyonyam* などに当たる副詞が本文、あるいは註釈に現れている場合、mid. の機能に由来するものと看做し得る⁶⁾。

以上の点から、ここでの -*muccati* は mid. の意味を表すために現れていると見られ、-*muñcati* に直さずとも解釈できる。Be の読みも二次的と見るべきであろう。

2.2. 同様の事例として、次の Jātaka 韻文に見られる並行表現2例を挙げることができる。

Ja IV 285, 12*- (v. 23) ≠ (v. 24) *imaṃ mayhaṃ hadayasokaṃ paṭimuccatu* [Ee, Ce, Be -*muñcatu*] *rājaputta tava mātā / yo mayhaṃ hadayasoko kimpurisaṃ apekkhamānāya* // 「私のこの心の痛みを受けよ！王子よ、お前の母が！夫（キンナラ）を愛している私の心の痛みを！」

Ja VI 148, 27*- (v. 682) ≠ (v. 683-685) *imaṃ mayhaṃ hadayasokaṃ paṭimuccatu* [Ee, Se, Be -*muñcatu*] *Khaṇḍahāla tava mātā / yo mayhaṃ hadayasoko Candasmīṃ vadhāya ninnīte* // 「私のこの心の痛みを受けよ！カンダハーラよ、お前の母が！チャンドが殺されるために連れ出されたときの私の心の痛みを！」

いずれも Ee では -muñcatu となっているが、本来 -muccatu であったと考えられる。まず意味の点で、2.1. と似て *hadayasoka*-を動作主が「自らに受ける」と取れるため、indirect-reflexive mid. が適する。ここでは註釈を含め再帰代名詞の存在は確認できない。問題は各版本の読みであるが、多少煩雑なため以下の表にまとめる。

Candakinnara-Ja (Ja IV 285)				
Ee	Ee mss.	Ce	Se	Be
-muñcatu	C ^{ks} -muccatu B ^d -muñjatu	-muñcatu	-muccatu	-muñcatu
Khaṇḍahāla-Ja (Ja VI 148)				
Ee	Ee mss.	Ce	Se	Be
-muñcatu	all three mss. -muccatu	-muccatu	-muñcatu	-muñcatu

2.1. の例からして信頼性の低い Be を除くと、-muñcatu の読みは Ce, Se に交差して現れるのみで、Ee においてはビルマ写本の -muñjatu が近いが他に支持がなく、我々が目にしているのは校訂者 Fausbøll による改変であると分かる。

以上の点から、これらの読みは本来 -muccatu であり、mid. の意味を表す例と見てよいだろう。

3. 以上3例（実質的には2例）の *paṭimucca*-^{ti} が mid. の意味で用いられる例を挙げ、同時にこの問題がテキスト批判に関与することを示した。 *paṭimuñca*-^{ti} と *paṭimucca*-^{ti} の対立はあくまで -cc- の読みが存在した場合のみ、act.:mid. の関係として理解できることを意味し、mid. が適するからといって必ずしも -cc- が現れるとは言えない⁷⁾。いずれにせよ今回の3例については、文法書の記述に付け加えるべきであろう。

1) Geiger § 175.1 (*ādiya-ti*), 176.1 (*vediya-ti*, *vādiya-ti*, *sādiya-ti*); von Hintüber § 415 (CPD s.vv. *ādiya-ti*, *uttariya-ti*, *upādiya-ti*, *uppacciya-ti*; *hīya-te*; PED s.v. *rucca-ti*); Sakamoto-Goto 1993, 272 (*sādiya-ti*, *vediya-ti*, *paricāriya-ti*, *vivādiya-ti*, *pāliya-ti*). Pishel § 550, BHSG § 37.23 もまた同種の事例ではあるが、pass. が act. の機能をもつ例として挙げられている。

2) 同論文の日本語簡易版：阪本（後藤）1996。

3) あるいは affective（関与的）とも。mid. の機能について詳しくは Gotō 2013, 79f. を参照のこと。

4) 中村 1986, 260 注7においても Geiger の意見を支持する。

5) 同じ表現が *gaṇṭhikaṃ paṭimuñcitvā* の形で Vin に5例確認できるが、いずれも -ñc- 以外

の異読はなく、Se の読み -cc- は本文の -muccati に影響されたものと思われる。

6) Cf. Sakamoto-Goto 1993, 272; 阪本（後藤）1996, 22.

7) 例えば Ja VI 525, 2* (v. 1979b) *paṭimuñci upāhanaṃ* 「[バラモンは] サンダルを履いた」は indirect-reflexive の一種と見ることもできるが、読みは一貫して -muñci を示す。

パーリ文献の略号。引用の書式は CPD, Epilegomena に従う。Ee を底本とし、比較に Be, Ce（三蔵のみ）、Se を用いた。ヴェーダ文献及び一部の二次文献の略号は日本印度学仏教学会「ヴェーダ文献学関係略語および書誌一覧」に従う。

〈略号表〉

Be = Burmese edition: Desktop Software Chaṭṭha Saṅgāyana Tipiṭaka 4.0, Vipassana Research Institute. **BHSG** = Edgerton, Franklin. (1953) 2004. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary Volume I: Grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass. **Ce** = Ceylonese edition: e-text Buddha Jayanthi Tipiṭaka, Sri Lanka Tripitaka Project (<https://www.accesstosinsight.org/tipitaka/sltip/2018/9/10確認>). **CPD** = begun by Trenckner, V. 1924—. *A Critical Pāli Dictionary*. Copenhagen: Royal Danish Academy of Science and Letters. **Ee** = European edition: Pali Text Society 版. **Geiger** = Geiger, Wilhelm. Ghosh, Batakrishna, trans., Norman, K. R., ed. (1916) 2005. *A Pāli Grammar*. Oxford: Pali Text Society. **von Hinüber** = von Hinüber, Oskar. (1986) 2001. *Das Ältere Mittelindisch im Überblick*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften. **PED** = Rhys Davids, T.W., Stede, William. (1921–1925) 2015. *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*. Oxford: Pali Text Society. **Pischel** = Pischel, R. Jhā, Subhadra, trans. (1900) 1999. *A Grammar of the Prākṛit Languages*. Delhi: Motilal Banarsidass. **Se** = Siamese edition: CD-ROM Buddhist Scriptures Information Retrieval, Mahidol University Computing Center.

〈参考文献〉

- Geiger, Wilhelm, trans. fortgeführt von Nyāṇapōṇika. (1925) 1990. *Samyutta-Nikāya Erster Band*. Wolfenbüttel: Institut für Buddhistische Existenz.
- Gotō Toshifumi. 2013. *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Sakamoto-Goto Junko. 1993. "Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa." *Jaina Studies in Honour of Jozef Deleu*. Tokyo: Hon no Tomosha, 261–314.
- 阪本（後藤）純子 1996 「Uttarajjhayāna X 1–36d samayaṃ goyama mā pamāyae——使役法中動態に由来する中期インド語動詞——」『ジャイナ教研究』2: 17–38.
- 中村元訳 1986 『ブッダ 神々との対話 サンユッタ・ニカーヤ I』岩波書店。

〈キーワード〉 パーリ語、中動態、middle, medium, prati-muc

（東北大学大学院修士課程修了，修士（文学））